

民俗学から見たホトケの考察

和田 謙 寿

一

ホトケとは Buddha の略称で、通常仏教では知者、覚者、悟りなどと釈し、梵語、パーリ語とも同義の立場をとっている。漢字では仏の字を用いているが、その他、仏駄、浮陀、浮図、浮屠、浮頭、歩他などと書かれ、その表現は色々である。ホトケそのものについても、学者の間では古来より諸説があり、仏足石歌における保止気や、中国での儒家に対する浮図家、または浮屠迦耶などより、生じたものであるなどと考えられている。しかし、実際にはその真意は未だ詳かでない。徒然草参考の舜統院の西谷鈔によれば、和語にほとけと読む事四義ありとして、

一、煩惱のきづなほどけしと云う心（「ホドケ」心の解けることにて、煩惱の繫縛を解脱する意）

二、万法の義理をよく心得、ほどけるゆゑなりということ。

三、善光寺の如来を、守屋などが火に焼きけれども、湯に

ならざるゆゑ難波江にすてたりしをほりだして見れば、ほとほりけ有りしゆゑ也。

四、聖徳太子仏の御経を点じてよみほどけるゆゑ也。

とあるが、その意は何れも取るに足らないものようである。その他、屠竜工随筆や貞丈雑記などにあるものは、前著よりの引用的なものであり日本釈名巻中の「ほとけは人の、：けは消ゆる……」の転化説、つまり仏は人の消えたものなりと云う考え方や、東雅方（四）にあるが如きホトケは百済の方言に似、それより引用せられたものであらうと云う説などが、種々存在している。浮図や仏陀のホトに対する考え方はまんざら通じぬわけではないが、ホトケのケが朝鮮語の接尾辞のそれであったり、円珠菴雜記における如く木（貴人を木に譬えるため）を付け加えるがような解釈では、実におぼつかない次方である。もともと、ホトケは仏教的なものとして、深い立場を持っているが、民間に伝わっている旧来よりのホトケの観念と比べてみると、あまりにも掛け離れている

感がある。地域的にも、ホトケと云う言葉が使われている範囲は割に片寄り、またその内容が非常に広範囲に解釈せられているのもホトケを考える上に、大きな問題を与えてくれるものである。ホトケの語源について、前述の説明とは別に、民俗学的立場から見た解釈がある。それは、我が国で古来先祖(死者)を供養し祭るために用いられた器物、「ホトキ」

よりの転訛が「ホトケ」であると云うのである。缶(ホトキ)は土製の行器であり、昔日においての、ホトケを祭る時になくしてはならぬうつわの一つであった。盂蘭盆の行事に、山海の珍味を添えて祭り、供えた盆(うつわ)の名称が、いつしかお盆の名称につながってしまった事実や、稻荷大明神のお使い役の白狐が、いつのまにか正一位稻荷大明神の本体に祭りあげられてしまったが如き事実は、ここにもまた展開せられたのかも知れない。柳田国男氏は、仏の字を考察されて、これをサラキと読ませることに大きな関心を払っておられる。大仏次郎氏のおさらぎがこれである。缶(ほとき)も甕(さらけ)も器物であり、これも信仰対象として利用せられた事は間違いのない事実である。宗教(仏事)と食物とは切っても切れない関係のものであり、こんなところにホトケの字義は発見せられるのではなからうか、つまりホトキがホトケに、さらに死者をすべてホトケと云うようになったのであるというのである。ホトケとか神とかいう言葉は、しばしば

聞かれるところであるが、ではこのホトケや神と祖先の霊魂とはどのような関係があるのであるのか、ホトケに対する考え方は、我が国古来より神霊的民間信仰的な観念と、仏教的な霊魂観念が習合発展して生まれたものであろうか？、我が国各地に於けるホトケにまつわる諸行事について考察する場合、非常に役立つてくるのである。

二

何れにしても、ホトケが仏教的な言葉であることは間違いない。世間一般では、死者を指してホトケと呼んでいる場合が多い、もちろん、仏教が始めて我国に到来した頃には、時代こそ異なるがキリスト教の初期教会堂を南蕃堂と指した如く、蕃神³とか客神とか呼ばれ、死者をホトケなどと云うことを夢だにしなければならなかったことであつたと思う。仏教的な面でホトケになるためには、非常に大変な修行をつむことが必要であろうが、世俗の場合には一概に、そのようなことを要しない。元来、宗教たる仏教が何故に、我々の祖先たちにいとも簡単に死すれば、「ホトケ」と呼ばしめたのであろうか、元々、仏教のねらいは個人の安心立命にある。古来の民間信仰における祖霊や家を大切にする祖先崇拜とは異なり、個人そのものに指向せられていったのである。仏教で説く涅槃は、本来人間の死(肉体の死)とは、直接に関係のあるものでは

なかつたのであるが、難解なる仏教哲学理論を解することのできなかつた庶民たちにとっては、到底、涅槃の側にも寄ることができず、自己充足の上に立つて自分なりの涅槃の域、つまり、肉体の死をもつて涅槃の域に達したとしたのである。そこには、人格の如何は考えられず、死者は皆悉くホトケになれると自他共に許し合っていたのである。かくて死者は即ちホトケとなり、そのまま我国固有の根強い祖先崇拜の場に喰い入り、個人的な色彩の強い仏教は家族という集団的な面にまで同調しながら教線を拡張していったのである。かようにして、古来、印度や中国にみられなかつた年回忌の思想も、我国では祖先崇拜を基調とした水田耕作にかかわる家族に同調し、印度での四十九日、中国に於ける大祥忌までの法要が、七回忌、二十三回忌、五十回忌などと異様な発達を示していったのである。

冠婚葬祭のうちなんと云つても、人生に於ける一大事は葬式の問題である。葬式の問題は、しぜん、先祖祭りたる追善の供養にも繋がるものである。祖先を祭る風習は古来よりのもので、はるかに仏教渡来以前にさかのぼるものである。我々が俗に仏事と云われる行事の中に、それ以外の民間習俗が数多く習合されていることによりわかる。葬送習俗、彼岸会の習俗、盂蘭盆会の習俗などが然りである。しかし、その中を通して、常にその核心をなしているのはホトケの問題であ

る。それは先述した如く、仏教で云われる理論的なホトケでなくして、それとは趣を変えた、大衆的、民間信仰的なホトケであった。昔における田の神も山の神も、先人たちは皆、祖先神のしからしめるものであると考えていたのであり、春の農耕予測の祭りも、秋の豊年収穫の祭りも詮じ詰めれば、皆、祖先に対する祈りと感謝を表わす行事であつたのである。お盆の時節に行われる各地での盆踊りも、豊作を祈り祝う祈禱であると同時に、念仏踊りと習合した、いわば祖霊と堅く結びついたところの厳かな行事の一つでもあつたりしたのである。また、ところによつては、中央部に精霊棚を設けて位牌を飾り、その周囲で踊つたり、あるいは新盆の家の前で、その霊を慰めるために踊つたりしたものであつた。一切衆生悉有仏性の名言の如く、死者すなわちホトケに到達すべきものなりという觀念が濃厚であつたのである。もつとも、同じホトケでも、不慮の災害によつて死亡した者、たとえ**ば**、難産の際の死亡者や土左衛門の如き者については、ミサキと云われて本ポトケとはっきり差別を付けていたのである。愛知県の豊橋地方における洗ひ晒の風習や、滋賀県、野州町地方に於ける流れ灌頂の行事などもその一例である。

三

如来と云う義に、ホトケを当てはめる場合がある。ホトケと

如来とは、世間一般に同一のものとして受け取られる場合も多いが、内容的には、仏陀の覚者と云われるのに対して、如来は、その本質的なものをさすと述べられている。観無量寿経には、ホトケの本質をかかげて、「仏心とは、大慈非是れなり」と述べ、心的な立場からとくに強調されている。元来、仏教の目的は、転迷開悟、つまり迷いを転じて、悟りを開かしむるにあり、その条件を備えたものが仏であるから、究極的な仏教の目標指針は成仏するにあると云えるのである。涅槃経には、大乘仏教の根本思想たる、一切衆生悉有仏性という名句がある。もちろん、一切衆生悉く仏性があるからとて、今すぐ成仏することができるといのではないであろうが、現世利益を願う一般庶民たちにとっては、その時期の少しでも早いことを望んでいることは確かなことであろう。とくに、虐げられた貧しい生活をしていた下級農民層にとっては、当然なことであった。士農工商とは名目だけで、朝から晩までただ機械的に労働を虐げられた農民層。家康の言葉によって後世まで残された江戸幕府の政策としての「百姓は、生かさぬように、殺さぬように」との主旨は、仏者の彼等に与えた、「後生において、成仏することができぬ。」と云う言葉で、大きな救いの手となったことは間違いない。このことは江戸時代以前においても同様なことが考えられたであろう。どんなにうまい話でも死んでから成仏できるので

は、彼等にとってはたまらないことである。死んでからの話では戯論であり、後世では役に立たない。そこに一般庶民の要求に応じたところの、実践的な宗教が待望されるのである。一切衆生悉有仏性、あらゆる生きとし生ける者は皆仏性を持つている。仏性を持つているからには、いつしか必ず成仏するわけである。成仏の可能性は認められたけれども、果してその訪れる日は何時の日であるのか、ここに問題がある。たとえ仏性があっても、煩惱の雲におおわれていたら目的は達せられぬのである。釈尊の「縁なき衆生は、度し難し」と云われたのはその辺を指向されているのかも知れない。道綽禪師も安樂集中に、「一切衆生みな仏性ありとせば、遠劫よりこのかた、応に多仏に値ふべし。何の因ありてか今に至りて、仍ち、自ら生死に輪廻して、火宅を出でざる。」と述べられ、更に、親鸞聖人もまた、『教行信証』真仏土の巻に、「感染の衆生、ここにおいて、性を見ること能はず、煩惱におおわるるが故に……かかるが故に、知んぬ安樂仏国に到れば、即ち必ず仏性を顕はす。」と。たとえ仏性を具有すと云えども、真如なるが故に、悉有仏性を現わす（發揮しうる）ことができるのであると述べておられるのである。その仏性は、信心によって開明せられるのであると示唆されている。中世から近世にかけての人たちのその多くの者は、来世の存在を信じていたが、死後悪道に陥ることを怖れて、後世

の善処を念じたのである。今昔物語にも、「本(8)ヨリ心直シクシテ、諂曲無カリケリ人ノ為ニ悪キ心ヲ、不発ズ。」と述べられ、これが往生の条件を成すものと考えられたし、また、極楽に往生することは、たとえ善根を生ぜずとも、ただ心を正しくして経を読み念仏を唱えるならば、その道に到達することができると述べられているのである。仏教と云うと、葬式のことや、死後の靈魂云々ということを誰しも思ひ出す。これは、近世を通して同様な風潮であった。しかし、仏教というものは決してそのようなものではない。五十年や百年先のことならばその時はその時のことで……と、誰もが真剣さを失なってしまうであろう。現在、いや即時に、悩める人々の、苦を救うところのものでなければならぬはずである。大衆の多くは、そのす速さを熱望していたのである。これに対して各宗派は、対応すべき古来よりの仏法觀の布教論を展開せしめたのである。真言宗と日蓮宗の二派は、先ず即身成仏、つまり主として、肉身面に重きをおいて説明したが、禪宗においては、是心是仏とか即心即仏、即心是仏、つまり精神面に重点をおいて活躍したのであった。これに対して、浄土宗は、即得往生を、しかも浄土宗においては来世極楽を、真宗においては、信決得の現今を指針としたのである。何れにしても、「夢」、少なき当時の庶民たちにとって一番あこがれのまとなったのは、何と云っても現世利益

であったのであろう。浄土和讃の一節、「信心よろこぶその人を、如来とひとしと説きたまふ、大信心は仏性なり、仏性すなわち如来なり。」にてもその心境を察することができるのである。阿弥陀経に、「この人終らむ時に、心転倒せず、即ち往生を得、」とあるが、例え現世利益とまで行かなくとも、死せば成仏の域に達することができる(9)と云う一言も、生前生活安心の一助となったことも大いに領けるところである。中世、近世の一般庶民、その大部分を構成するのは農民である。その農民の大部分は文盲であった。彼等の生活の多くは、支配階級の意志によるものが主流を成していたようである。ただ、彼等の唯一なる解放的気分を十分に味わえるのは、宗教的行事へのそれであった。村の鎮守のお祭りや盆踊り、寺院で催される諸行事、つまりお盆や彼岸の会合や、お堂で行われるお日待や念仏、地神講、庚申待の行事などであったであろう。仏教の内容とて、むずかしいことはわかるすべもない。せいぜい前載の熟語をかみ砕いてくれたり、仏教説話を話してくれた説教僧や、菩提寺の僧侶の話を聞いているのがせいぜいであったのである。宗派の別も、日蓮宗、浄土宗、禪宗系、天台、真言宗などを知れる程度で、これとても知識人に属する者のことで、一般には、南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華経、その他の宗派と云うような漠然としたものが多かったようである。ただただ先祖から受け継がれた寺院

に、忠実に仕えると云う程度のものであったのである。南無の字は、礼拝と切り離せない関係がある。南無と書けばその下の文句は、十中八、九までが、阿弥陀仏と付け加える。ナムアマミダブツの六字は各宗派を問わず、仏礼拝への合言葉であったのである。中には神に向って、ナムアマミダブツと唱える人たちもあるが、南無が梵語であり、訳して帰命と云う、「命を尽して、十方の諸仏に、帰依し奉る。」などと云ったところで、知っている人たちはおそらく何人もいなかったことであろう。しかし、信仰の強さはそこにある。強いて云えば、大衆仏教としての浄土宗団の力はそこに温存せられていたのであった。このことは現在にまでも尾を引いている。しかも民俗学的に見たならば、これによって、とくに真宗教団は大きなプラスを持っている。もともと、プラスの陰には、安穩として過ご去れない一面もあるかも知れぬが。……いずれにしても、一般大衆に根強く、しかもわかり易く教線拡張の目を差し向けた親鸞を始めとした同派の大徳には、威大なものがあった。とくに、御和讃の庶民間への発展は、お念仏の普及と共にホトケに対する認識を絶大にしているように感じられる。

「ホトケと如来」、「ホトケと菩薩」との関係、その道の人たちから見れば、その見境は何とか付くかもしれない。いや、本職の人とても、専門的に考えると色々な疑問が生ずる

かも知れない。いわんや、当時の人たちがこれ知らんとすることは大変なことであったであろう。むしろ、死んだ者がホトケになるという方がはっきりした理論でわかり易い。人情からしても、誰しもそうしたいものなのである。地獄から仏までの十界の説明では、人間はほぼその中辺に位し、菩薩は仏の一步手前に存在している。観世音菩薩でも、文殊菩薩でも、地藏菩薩でも、菩薩の心願たる、「自己得度、先度他」の見地にあるため、ホトケに昇格されるという話は未だかつて聞かない。しかし、そんなむずかしい理論は別として、民俗学的立場から見た(一般庶民から見た)菩薩は、いずれも皆、ホトケそのものとして考えられていたのである。

四

ホトケと云う言葉が通常、死者に用いられている場合の多いことは誰しも知れるところであるが、その他の意味に使われている場合も多々ある。鹿児島⁽⁷⁾の屋久島では、卒塔婆のことをホトケと呼んでいる。更に、法事のことを、菩提と呼んでいることは非常に興味のあることである。菩提を重ねる毎にホトケを大きくし、三十三回忌の最終年忌には、二尋ほどもある高いものを建てると云われている。このことは、柳田氏も先祖の話の中に述べておられる。同様なことは東北や佐渡の地方にも流布されていると云われるが、これを、ホト

ケボ（棒）または、トリアゲボトケなどと名付けられ、後越の地方一円にもあると云われている。（山村手帖）もちろん、家庭の仏壇中に安置されている位牌をホトケさまと呼ぶ地方もよく聞くところである。幼児語の一つとして、神仏^⑨に対して「ノンノンさま」とか「ノンノさま」または、「ナムナムさま」と呼んでいる地方がある。時には、太陽やお月様を指す場合もあるが、その対象の多くは仏壇に向けられているようである。「ノンノンさま」の、「ノンノン」はおそらく、南無阿弥陀如来とか、南無釈迦牟尼仏などの場合の、頭文字の略省と思われるが、幼児や老人が簡単に、神仏、とくにホトケに拝む場合には最適な参拝語である。現在、「ナムナム」の参拝語は、ホトケに対する合言葉として、広く多くの参詣者の間に使用せられている。また、東北を始めとして、一部に「ノンノンさん」に変わって、「マンマさま」と云う言葉が、存していると云われているが、マンマは、小児言葉の御飯のこと、毎朝、仏壇のホトケさまに対し、山盛りにした一杯飯をあげて拝むためにこの習俗が転じて、マンマさまになったのだと思われる。元来、東南アジア、とくに日本の如き稲作専門の地域においてはその耕作の性質上天候に支配され、しかも仕事内容も片よって非常に忙しいため、自然に一家全員の重労働となり、祖父母や親、子の共同作業には印象的な面が強くなる。そのため一層家族間同士の縦横関係は緊密と

なり、共に語り合った感情の交互は祖先との交わりを強くし、信仰の中心は農耕儀礼と密接な関係を持つに至り、ホトケを通しての諸行事が年中行事として重要なものと成っているのである。これは、さほど^⑩労力を要しない小麦耕作地域や、乾燥遊牧地域などに比較して大きな異なりを示すものである。死者をホトケとする考え方は、やがて死者の宿るところは皆、ホトケと縁のあるものとみなされる。その思想が凝り固まると、そのものがズバリ、ホトケ的な観念へと考えられて行くのである。位牌や墓石が、ホトケとして考えられてくるのもそのためである。江戸時代中期以前には、死後すぐに墓地を構築できるような人たちは、農民の間には一部の富貴層を除いてあり得なかったのである。人が死ぬと、せいぜい埋葬地に円く土を盛り、近隣の小石を拾ってその上にのせ、墓地埋葬のしるしにするか、またはマジックとしての要素を持たせるにすぎなかったのである。近隣の小石と云っても、地方によっては種々なる条件がつけられている場合もあったのである。その場合の石称は、ショウコンイシ・頭石・アライネ石などと、種々^⑪地方によって呼ばれているが、結果的にはホトケ石と云うべきもので、その出所も近くの海岸や河川から取り出したきれいな石である。それを直接墓所へ持参したのもや、または一度死者の枕もとに置かれ、葬式行事を経た後に持ち運ばれたものかの何れかである。枕石もホト

ケ石もつまる場所は墓と関連のあるものであって、死者の枕元に置いたり、棺の釘を打つ時に用いられるような石は、しぜん、小型のものであり、墓じるしとして利用せられる場合は多少大きなものと変ってくる。現在でも、長崎県平戸島の如く片岩性の多いところでは、平石材を埋葬地の上に幾重にも重ね、連成の墓としているところもある。一般的に墓碑として利用せられるホトケ石の場合は、丸味を帯びたところの長方形の石が多く、それに法名などが書き加えられるようになる。石面の活用上更に長目のものが要求されるに至り、経済的に部落そのものが成長発展すると自然墓的なものより、徐々に巷におけるが如き角碑状のものがつくり出されてくるのである。死んだことを、成仏したと云い、死者即ちホトケさまだということ、日本では一般的に云われるところである。同じホトケさまでも三十三年からになると、先祖

様になるとか神になるとか云われて、前述の場合のホトケとその趣きが少々変ってくる。地方の各地によってその年月は異なるであろうが、一般的に見て死後四十九日後を忌明けと呼び、壇払いをして位牌を仏壇に納めたり、河岸や海岸にて浄めの行事を行ったりするし、三十三年になると弔い上げと云って、最終の年回をこれによって終了させ、仏壇に置いていた位牌を焼いたり、墓地に埋めたり寺院に納めたりする地方もある。墓地には葉つきの杉塔婆を建てることなどし

て、これによって公のホトケ、先祖の一員となることを願う祭るのである。ところによっては、忌明け、弔い上げの月日の長短はあろうが……これは当地の従来よりの慣習を始めとして、外部との交通や経済事情、それに、ホトケに対する感情の如何によって決定されるのである。平家などの落人の住むと云われる山間僻地、山窩の如き山岳部を放浪し歩きまわる土民たち、仏教習俗のほとんど伝播し得なかつた盆地の住民、古来よりの支配者の影響による特殊な文化地域の住民、農耕などの如き自然現象を中心として生きてきた人たちと、商工業者の如き人間を相手にして生きてきた人たちとは、それぞれ、それに伴う習慣行事に対する見識は大いに異なる点があるのである。

五

民間信仰としてのホトケは種々なる力を有していた。里の神、山の神が、祖先のあらわれであったと解された如く、庶民の「かくの如くあってほしい。」と云う願望を組み入れるのも、祖先を通してのホトケの念力であったのである。俗に仏教に対して、葬式仏教だとか、儀式仏教、祈禱仏教、観光仏教などと、色々音沙汰されるけれども、このような在俗的なものがあつたからこそ、一般庶民層の心の底まで滲透して、今日まで愛される仏教として持ちながらえてきたのであ

る。もちろん、学問的な純仏教理論も大切なことは当然であるが、また反面時においては、仏教学という学問的な知識が、かえって純朴な民間仏教信仰の妨げとなった場合もあり得たのである。民間に行われた仏教的習俗の主なるものとしては、農耕に関する念仏や、疫病退散などに関する諸行事をあげることができるが、とくに千葉¹³県印旛郡地方や、茨城県、新潟県、中国地方、四国など各地において行われた虫送り念仏、虫供養念仏。茨城県や山形県、熊本県、愛媛県などの日本各地に名残をなしている雨乞念仏の行事、関東平野一円に残る五穀豊穰を祈願した天道念仏。さらには、雹害を避けての雹除け念仏など、多種多様な行事が存在したのである。また、疫病退散に関しても、高知県や山形県などを中心として行われた病送り念仏を始めとして種々なる祈禱念仏が行われていたのである。これもせんじつめてみれば、ホトケを背景としたところの行事にほかならなかつたのである。祖先(神)としてのホトケは、我々人間に対して威大なる不可思議な力を持つものとして考えられ、天変、地変などことあるときには、必ずと云ってよいほど救いを求めたものなのであった。もちろん、浅草の観音さまや、刺抜き地藏、成田の不動、豊川稻荷など別系のホトケに頼る風習もあったけれども、これとても先祖の残した文化遺産の一つであり、各家々の仏壇の奥底には、上記の霊場・仏閣などのお札が大切に保

存せられていたのであった。「転迷開悟」・「離苦得楽」、「止悪修善」、これは仏教の指標であると同時に、ある意味ではホトケになるための条件であった。昔から、ホトケになると、生きながらして極楽の世界に侍ること、現世利益に預からんとして善業を積もうとした人々は、数多くあったことであろう。各祖師たちもその道を説き明かしたが、結果的には一定の文化人を経るにすぎず、一般庶民の間には唱名や念仏によって受け取られる場合が多かつたのである。しかし、その根本思想としての拠所は、道元禪師の言によって知ることができる。「生を明らめ、死を明らむるは、仏家一大事の因縁なり。」と、生死観の重要性を説き、更に「仏¹⁴となるに、いとやすきみちあり、もろもろの悪をつくらず、生死に著する心なく、一切衆生のために、あはれみふかくして、かみをうやまひ、しもをあはれみ、よろづをいとふところなく、ねがふところなくて、心におもふことなく、うれふることなき、これを仏となづく。」とわかり易く、ホトケに対する理念を教示しておられる。觀念上でのホトケ。釈尊を指してのホトケ。我々の前に現存しているホトケ(つまり、人徳を慕って、崇め奉られたところの生きホトケ)。出羽三山を中心としての、修験的立場を密めて構成された即身仏(ミイラ)としてのホトケ。一般大衆間にしみ渡った死者としてのホトケ。祖先神としてのホトケ。死者の対象物を代償としたとこ

ろのホトケ。など、ホトケに対する見方は至って多種多様である。死者が、そのままホトケとなるという考え方は、前にも、しばしば述べたところであるが、葬送習俗の過程において、成仏するための行事がなされていた場合が割に多いものである。とくに、葬送の儀礼は生死の結着に大いなる関係があり、引導法語文の内容は、そのまま各宗派の成仏觀に連なっていたのである。元來、引導の意義は、「死者を迷路より悟境へ引き導くこと。」であり、悟境に導くとは、成仏させると云う一語に、尽きるのである。禪宗を始めとして、天台、真言、日蓮、浄土の各宗においては、何れもそれぞれの主旨を持った引導が、厳正に渡されているが、とくに、真宗では、引導を渡すと云うことはなく、祖師以來より用いられてきたところの正信偈や、御和讃、御文章などを読みあげることになっていた。ここに、主なる宗派¹⁵の引導法語の一端を取り、比較考察すると次の如くなる。つまり、

天台宗においては「伏して惟みれば、高靈（法名○○）居士は、内には三省をつつしみ、外には五常を施す。然りと云えども、趣の依身は、例えば月回るが如く、三界の果報は、さながら鳥の翔けるに似たり。この故に、轉變の強風にわかち起つて、幻化の妙葉たちまちに墜つ。高靈、徳言内にみち、容功外に備はると云えども、油薪付き安く、流水とどめ難し、ここを以つて面華たちまち異滅の天に凋み、玉樹空し

く、無常の風に折れ畢んぬ。非しい哉生者必滅の掟、痛まし
い哉会者定離の理。しかず精神の白善を修して、浄域の要律
を示さんには。この故に、香華燈塗の供具を供へ、妙力の秘
法を行す。若し然らば、法名○○○○は九界の昏衢を出で
て、十転開明の暁に至り、四仏の妙台に入つて、五智円満の
光を添へ、乃至、依正を利益せむ。すなはち、法を久住せし
め、人天を利益し、過去英靈を成等正覚せしめんが為に。南
無觀世音菩薩、南無摩訶毘盧遮那如来。」

真言宗においては、「……ここにおいてか、新円寂（○○）
仏を敬ふに信あり、義を守るに私なし。然りと云へども、降
年四十有二にして、病悩の床にのぞみ、祈医の二縁に力を失
ひ、竟にすなはち命葉の零つること眠るが如し、眼光やうや
く閉じ畢んぬ。これによつて、孝子等憶はざるに、忽ち黄泉
の別れに値ひ、非啼号泣の涙とどめ難し。如かず浙靈の菩提
を祈り、秘密の梵筵を催し、十界遮那の原野に送り、方にい
ま即身成仏の印明を、示さむ。休矣、幽魂は三密加持の力に
よりて、一生たちまちに、晴れ剩さへ自身本具の羅字の炬火
を以ちて、無始劫來の罪業を梵焼す。ああ、尊い哉、早く両
部の聖衆と共に、密嚴華藏の淨利に遊ばむ事を。依つてここ
に三摩地の法を説き、即身成仏の秘法を修す。乃至、法界平
等拔濟せむ。阿、尾、羅、吽、欠」

浄土宗においては、「……ここに新帰元（○○）幸ひにし

て、今受け難き人身を受け、遭ひ難き本願に値ふ興し難き道心而起して、離れ難き輪廻の里を離れ、生まれ難き浄土に往生せむこと、悦びの中に喜びなり。阿弥陀仏は、不取正覚の誓ひを成就して、現に今、彼の国に在します。当に知るべし、本誓の重願空しからず。衆生称念すれば必ず往生を得。仰ぎ惟んみれば、釈迦は此方より発遣し、阿弥陀は、彼の国より召喚したまふ。豈に去かざるべけんや。往詣樂邦の首途に一句の餞別せむ。

莫謂西方遠 唯須 念心」

○) 汗馬哲の匠、武門の柱墳。越山呉地、歩々妙莊嚴にあらずと云うことなく、春花秋月、頭々全く、浄法界の身を彰はす。六用虚豁、三際弥綸。常に、莫耶の宝剑を揮つて、無明山上の悪獸を斬却し、或ひは公望の竿線を垂れて、般若海中に、巨鱗を釣得す。即ち、かの世間の相、遊戯す方外の津。真如の際に入つて、真如に住せず、泥牛耕破す却前の地。生地の中にあつて、生死を出離し、木馬趨奔す柏上の塵。這裡に到つて、甚んの仏界、魔界を論じ、甚んの縁因了因を説かむ。這個はこれ真俗不二解脱の三昧なり。轉身の一句、箇の指陳あり。

露

毘嵐特地は天地を捲く、冷笑す元来無住の人」

日蓮宗においては、「……ここに、新婦寂○○維れ時、何年何月何日、一息たちまちに絶へ、五大たちどころに散じおわんぬ。悲しい哉、生死の海、漫々として没しやすく、涅槃の頂、峨々として攀ぢ難し。然るにこの妙法蓮華経は、これ彼岸に至るの船筏、道場に至るの宝庫なり、靈や幸ひにして、一乗受信の家に生れ、常に、唱題読誦の妙行を修す。即身成仏の大果、豈に虚しからんや……因身の肉団に、果満の仏眼を備へ、有為の凡慮に無為の聖衣を着ぬれば、三途におそれなく、八難に憚かりなし、七方便の山のいただきに登りては、九法界の雲を払ひ、無垢地の園に花開け、法性の空、月明らかならむ、この人、仏道において決定して、難あること無し。の文類あり、唯我一人よく救護すとの仏説疑ひなし、納収して識あり、永却失なはず、生死常夜を照らす。南無妙法蓮華経」真宗においては、前述した如く引導なるものは、渡さないのを常としている。当宗は、他宗の僧侶とは異なり、自から他を教化するが如きことをせず、僧侶自身も煩惱を有し、罪惡を具する凡夫にして、他の在家信者と同様、阿弥陀の本願によって往生せられるものと考えられている。それ故、この宗派では葬儀にあたりても僧侶が導師となつて亡者の引導を渡すと云うことはせず、従つてかような作法は持たない。他宗で云う導師をとくに調声師と云う由縁はここにあり。しぜん、引導に変わる立場として、祖師がおつくりにな

った正信偈や御和讃を諷誦することになっている。今ここで、一般に使用されている葬儀用の御和讃を掲げると次の如くである。

『本願力にあひぬれば、

空しく過ぐる人ぞなき、

功德の宝海みちみちて、

煩惱の濁水へだてなし、

正覚の華より化生して、

衆生の願樂ことごとく

すみやかに、疾く満足す。』

『真実信心うる人は、

すなはち、聚の数に入る

不退のくらゐに入りぬれば、

必ず滅度にいたらしむ、

仏智の不思議をあらはして、

変成男子の願をたて、

女人成仏誓ひあり。』

以上は、天台、真言、浄土、禅、日蓮、真宗における引導法語(御和讃)の一端を、掲げたものであるが、いずれも自力他力は別として、死即成仏の立場を取っている点が注目される。とくに、真宗の場合の行き方は、肉食妻帯を持った凡夫的な立場を取り入れつつ、民間に深く喰い入ったため、そ

の拡張力はめざましく、禅宗の(特に曹洞宗)新田開発に沿った米場地帯への進出と相まって発展していったのである。そして、一般民衆の考えた民間信仰的な死の世界には、仏教の十萬億土と云う遠い觀念に対して、割に近いところにホトケを見つめた場合もあったのである。薩南諸島⁽¹⁶⁾から沖繩にかけては、後生と云う言葉で来世をあらわし、死後の世界は現世とあまり変りなく、近くにあるものと考えられたし、関東南部においても同様な立場を取っているところがある。ホトケという言葉は今や日本においては、釈尊を始めとした觀世音、薬師などの諸菩薩、諸如来、または、死者を指しているが、その定義も昔日に比較し変りつつある。

1 望月仏教大辞典・禅宗辞典(人保如天編)

2 柳田国男「先祖の話」昭和二十一年四月十五日 筑摩書房

一四四頁

3 同右 一四三頁

4 鈴木栄太郎「日本農村社会学原理」二六四頁

5 柳田国男「民族」第一卷五号 二二三頁

6 井之口章次「仏教以前」昭和二十九年十一月三十日 古今書院 二二二頁

7 綜合日本民俗語彙第四卷昭和三十一年三月三十日 平凡社 一四二九頁

8 今昔物語十五、丹波中将雅通往生語 四十三

9 和田謙寿「仏教と民俗」——のんのさま雑考——昭和三十五年

- 五月三十日、日本仏教民俗学会 三十五頁
- 10 和田謙寿「岩井博士古稀記念典籍論集」―風土仏教の方法論的考察―昭和三十八年開明堂 八〇四頁。
- 11 井之口章次「仏教以前」昭和二十九年十一月三十日 古今書院 一六七頁
- 12 最上孝敬「詣り墓」昭和三十一年二月十日 古今書院 一七三頁
- 13 仏教大学民間念仏研究会「民間念仏信仰の研究」隆文館 一七〇頁
- 14 正法眼藏生死の巻
- 15 真継雲山編「仏教詞林集」昭和十九年三月二十日、日本仏教新聞社 二二〇―五頁
- 16 大藤時彦「民間伝承」第十卷三号―死霊と後生― 三頁